国立国語研究所学術情報リポジトリ

推量表現の分布と地方誌情報の連結

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 雅子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002944

推量表現の分布と地方誌情報の連結

吉田 雅子[†]（研究開発部門第二領域）

1．はじめに

日本語の方言には様々な推量表現の形式がある．東日本のベー，中部日本のズラ，西日本のヤローなどはその代表的なものとして広く知られているが，これらを一覧できる資料の1つが『方言文法全国地図』(以下 GAJ)である．GAJ には各文法形式を全国一覧するという大きな目的がありそれにそって調査や地図作成がなされていることから，各表現形式の詳細な記述には及んでいないという資料的特色がある．このような性格を有する GAJ のデータとそれ以外の情報－方言学・言語学の各論文・資料，地誌情報，文献情報など－のデータを補完・融合・共有させるとどのような知見が得られるだろうか．ここでは推量表現に関してそのことを試みる．

まず推量表現とはどのようなものであるかを概観し(2)，次に GAJ に表れている推量表現について検討する(3)．今回は古典語の「らむ」「むずらむ」に由来するとされる(ズ)ラ系の推量表現形式を取り上げ，その使用地域を対象に記述した言語および言語に関わる情報(「地方誌情報」)と GAJ のデータを比較してみる(4)．さらに GAJ とそれらの情報を連結させることで得られるものについて検討する(5)．

上述のように，ここでは，各地域の言語および言語に関わる記述情報を「地方誌情報」と称することにする(この点については 4.1 において後述する)．

2．推量表現の概要

推量表現とは，話し手が自らの想像や判断を表現するときの言語形式である．一般的な形としては共通語の「だろう」，その丁寧形の「でしょう」や文章体の「であろう」などがこれにあたる．

推量表現の形式としては次のようなものが挙げられる．

①推量の助動詞によるもの．文語・古語表現では「べし・まじ・めり・む・けむ・らむ・らし・まし・じ・なり」など，口語・現代語表現では「う・よう・らしい・だろう・まい・でしょう・ようだ・そうだ」などが用いられる．

②推量・打消推量の表現と呼応する陳述の副詞によるもの．文語・古語表現では「けだし・よも・をさをさ・さだめて」など，口語・現代語表現では「おそらく・おおかた・たぶん・まさか・よもや・さぞ・さだめし」などが用いられる．

③形式名詞「はず」によるもの．

④疑問表現およびその系統の表現形式によるもの．文語・古語表現では「ずやとおもふ・やもしれず」など，口語・現代語表現では「かもしれない・かしらん・かしら」などが用いられる．

⑤動詞によるもの．口語・現代語表現では「(と)思う・(と)考える」などが用いられる．

ざっと取り上げるだけでも以上のようなものが例示できるが，これに加えて「あの人は山に行くだろう」の意で表現される「あの人は山へ行く」というような言い方も広義では推量表現とする考え方もある．またこれらの形式で表現されるものの意味内容は，推量とくくってはいるものの，細かく見ると想像・推定・婉曲・仮定・可能・意志・勧誘・命令・当然・義務・疑問など様々である．さらに，その軽重の程度差がある場合，詠嘆の意味を伴う場合，否定表現と共に用いられる場合，テンス(時制)表現と連合した場合などもある．

推量表現の史的変遷を(主に文献に表れる語を対象に)みておこう．古典語では「推量」＋「過去」(例．

† 連絡先） yoshida@kokken.go.jp

けむ)や,「推量」+「否定」(例. じ)など,1語の中に2つ以上の意味を合わせ持っているものが多かった. 推量・認識のしかたそれぞれに対応する助動詞を用いていたといえる. それが近代語になると1形式1意味で対応させるようになる.「否定」は「ない」,「過去」は「た」,「推量」は「だろう」が意味を担い, 複合する意味はこれらの形式を「なかっ+た+だろう」のように組み合わせて表現するようになった. 大きな流れとして, 古典語の融合的表現から近代語の分析的表現への変遷ということが指摘できる.

3. GAJ に表れている推量表現

前節で概観したように, 推量表現は形式・意味内容ともに多彩な面を示す. GAJ においては, 推量表現を, 形式を中心に基本的な形を把握することを目的として調査票設計, 調査, 編集作業がなされている. 形式中心ではあるが調査回答データから意味内容の一端もうかがえる. 方言形式を一覧できる GAJ の言語地図・データを見るとさらに多様な推量表現に触れることができる.

3.1 GAJ の推量表現項目

GAJ で扱っている推量表現の調査項目は 11 点あり, そのうち 9 項目が地図化されている(プロジェクターの[質問番号/vol. /地図番号/題目/質問文]参照).

GAJ3 所収分においては, 動詞・形容詞・形容動詞の広い意味での活用形の一環として「推量形」を取り上げており, それぞれ共通語の「~だろう」に対応する形式を地図化している.「書く」「来る」「する」「高い」「静かだ」という各語の推量形という活用形が主要な注目点である.

GAJ5 所収分においては,「動詞+だろう」の推量形式が否定文や,「のだ」文や, 過去文になった場合, さらに動詞部分が名詞になった場合の形式が主要な注目点である.「行くだろう」の「だろう」,「行くのだろう」の「のだろう」,「行っただろう」の「ただろう」,「行ったのだろう」の「たのだろう」などの部分により注目しその分布が明らかになるような地図化の方法が採られている.

このようにGAJ3とGAJ5では着眼点の違いはあるが, 推量表現を形式を中心に基本的な形を把握するという目的は同じであり, 編集方針の根幹に違いはない. GAJ3 でとった方法を基本に, 修正を加えて GAJ5 は編集を行った.

以下, GAJ5,GAJ3 の順に各地図を概観し, 分布の特徴や特色ある形式について簡単に述べる[1].

3.2 GAJ5 所収の推量表現

3.2.1 237 図 行くだろう (プロジェクター地図参照)

「動詞+だろう」形式の地図で, 238 図および 239 図の核となるものである.「だろう」にあたる部分が色分けされている.

水:roo 類・raa 類・doo 類・o 類・noowa 類(以下「roo 類」):代表例[ikudaroo]:北海道, 東北日本海側, 西日本を広く多う. 関東地方と中部地方では他の形式と混在する.

緑:zu 類:代表例[ikudarazu]:長野を中心に, 岐阜, 愛知にも分布.

赤:bee 類:代表例[igube]:東北中心, また関東にも多い. 北海道にも分布.

橙:sani 類・hazu 類(以下「sani 類」):代表例[ʔ iku ɴ sani]:琉球方言の形式.

茶:gotta 類・kamo 類(以下「gotta 類」):代表例[igugotta]:東北北部と, 鹿児島薩摩半島, 種子島

---

[1] 237~240 図(GAJ5 所収)の主たる担当者は小林隆(方言文法全国地図作成検討委員), 112~116 図(GAJ3 所収)の主たる担当者は小林隆(研究員), 加藤和夫(地方研究員)である(所属役職は当時のもの). なおこの節での記述は『方言文法全国地図解説 5』ならびに『方言文法全国地図解説 3』の「各図の解説」を適宜参照している.

に分布.

紺:上記以外の二次的・語彙的回答の類:代表例[iku N dewanaika]

3.2.2 238 図 行くのだろう (プロジェクター地図参照)

「動詞+だろう」形式が「のだ」文になるときの地図. 237 図に比較し, 準体助詞の加わった形式が多く回答されている.

水:roo 類:代表例[iku N daroo]:北海道, 東北日本海側, 西日本を広く多う. 関東地方と中部地方では他の形式と混在する.

緑:zu 類:代表例[iku N darazu]:長野を中心に, 岐阜, 愛知にも分布. 島根県出雲地方にも 1 地点見える.

赤:bee 類:代表例[igunodabee]:東北中心, また関東にも多い. 北海道にも分布.

橙:sani 類:代表例[? iciisani]:琉球方言の形式.

茶:gotta 類:代表例[egunodagotta]:東北北部に分布. 鹿児島薩摩半島にも 1 地点あり.

紺:上記以外の二次的・語彙的回答の類:代表例[jukunodewanaika]

3.2.3 239 図 行っただろう (プロジェクター地図参照)

「動詞+だろう」形式が過去文になる場合の地図. イッツロ, イッツラなど過去推量独特の形式が出現している.

水:roo 類:代表例[ittadaroo]:北海道, 東北日本海側, 西日本を広く多う. 関東地方と中部地方では他の形式と混在する.

緑:zu 類:代表例[ittadarazu]:長野を中心に, 岐阜, 愛知にも分布. 島根県出雲地方にも 1 地点見える.

赤:bee 類:代表例[ittabe]:東北中心, また関東にも多い. 北海道にも分布.

橙:sani 類:代表例[? izja N sani]:琉球方言の形式.

茶:gotta 類:代表例[itta N dagotta]:東北北部に分布. 鹿児島薩摩半島南端部, 種子島にもあり.

紺:上記以外の二次的・語彙的回答の類:代表例[itta N denaika]

3.2.4 240 図 雨だろう (プロジェクター地図参照)

名詞述語の推量文の地図. 九州地方に gotta 類が多く見受けられる.

水:roo 類:代表例[amedaroo]:北海道, 東北日本海側, 西日本を広く多う. 関東地方と中部地方では他の形式と混在する.

緑:zu 類:代表例[amedarazu]:長野を中心に, 岐阜, 愛知にも分布.

赤:bee 類:代表例[amedabee]:東北中心, また関東にも多い. 北海道にも分布.

橙:sani 類:代表例[amide N sani]:琉球方言の形式.

茶:gotta 類:代表例[amedagotta]:東北北部, 山口西部, 九州西部に分布.

紺:上記以外の二次的・語彙的回答の類:代表例[amedenaika]

3.3 GAJ3 所収の推量表現

3.3.1 112 図 書くだろう (プロジェクター地図参照)

共通語における五段活用動詞の推量形の地図. カクダロー, カクジャロー, カクヤローの「だろう」類が西日本にある. カクローが新潟, 山口, 高知などにある. カクラが山梨, 長野, 静岡, 愛知に見える. 東日

本をベーによる表現が広く覆っている．カコーが中国地方，九州北部，富山に見える．東北北部にゴッタ類がある．

3.3.2 113 図 来るだろう（プロジェクター地図参照）

共通語におけるカ行変格活用動詞の推量形の地図．推量の意味を担う付属形式の部分は112図と重なる部分が多い．東日本のベーによる表現はクルベー，クルダンベー，クッペー，クンベー，キベー，クベー，コベーと様々である．中国地方や富山にコーがある．

3.3.3 114 図 するだろう（プロジェクター地図参照）

共通語におけるサ行変格活用動詞の推量形の地図．113 図と同様，東日本のベーによる表現は様々である．中部地方にはスル～，シル～，セル～が混在する．

3.3.4 142 図 高いだろう（プロジェクター地図参照）

形容詞推量形の地図．東北から関東にかけてベー類，中部に(ズ)ラ類，近畿にヤロー類，南九州にドー類，琉球にハズ類が見える．なお「高いのだろう」や「高いものだろう」のように，準体助詞や形式名詞に相当するものを持つ方言形も回答されている．

3.3.5 149 図 静かだろう（プロジェクター地図参照）

形容動詞推量形の地図．「静かだ」という単語が使用されにくい地域ではこれを各地の方言語形（例えばフソヤケ，ノーノーシー，オトガナイなど）を用いて回答しており，語彙的回答が多かった．新潟を含め西日本ではシズカダロー・シズカジャロー・シズカヤローなど「だろう」類がある．中国・四国地方にシズカニアロー・シズカナローがある．東北・関東地方ではベー，ペーによる表現で覆われており，接続する「静かだ」の部分にシズカダ～，シズカダン～，シズカダッ～などのバラエティがある．中部にシズカズラがある．

3.4 推量表現の分布の特徴

これまで概観した GAJ5,GAJ3 の推量表現の地図について，その分布の特色は次のようにまとめられる．

roo 類が西日本に，bee 類が東日本に，zu 類が中部日本に分布する．東北北部と九州南部といった本州両端部に gotta 類が表れる．琉球方言においては本州方言と別系統の表現がとられている．

特色を非常に大きくまとめるとこのようにいいうるだろう．以上，推量表現の全国分布概況を述べた．対してデータをどんどん詳細に見ていくことができる．凡例を見れば記号数，凡例語数の大概がわかるし，これ以外にも地図に採用されなかった語形や，回答に関する関連情報は解説および資料一覧に網羅されている．

今回は，詳細に検討する例として以下 raa 類による表現を見ていく．

4. 地方誌情報との比較

この節では，GAJ5 で称する raa 類について検討する．raa 類は，古典語の「らむ」「むずらむ」に由来するといわれる(ズ)ラ系の推量表現で，中部地方に分布する．主に次の 2 種類のデータを利用する．

<1>GAJ5 の推量表現に関するデータ．

<2>GAJ 以外の，(ズ)ラ系の推量表現を扱った論文やデータ．

GAJ データと地方誌情報を比較，統合，検討し，中部地方に分布する(ズ)ラ系の推量表現（GAJ5 でいう raa 類）について論じてみたい．

4.1 「地方誌情報」について

具体的な議論に入る前に，ここで「地方誌情報」について述べることにする．

「1．はじめに」において「各地域の言語および言語に関わる記述情報を「地方誌情報」と称することにする」と述べた．ここでは上記<2>がそれにあたる．今回は特に<1>の GAJ データと比較するために「地方誌情報」と称してもいる．

これとは別次元で，方言学全般に関与する「地方誌情報」について考えてみよう．

「各地域の言語および言語に関わる記述情報」にはいわゆる先行研究がその大半を占めるが，研究論文以外のデータ・資料なども重要な情報になることは方言学では多い．言語データそのもの，言語のデータではないが直接的・間接的に言語に関わってくるデータなど資料の性格は様々である．「記述情報」としたが，これは何らかの形で記録されているもの，不確定な流言の類よりは形を持ったものといった意味合いで，文書情報に限ることはしない．

以上のような性格のものを総称して「地方誌情報」としたが，この名称が最適だとは思っていない．特定の地域のデータを「空間情報」と総称しとらえることは空間情報科学の発展した現代ではよくなされるし，ここでいう地方誌情報も大きくとらえれば空間情報の一部であるが，現段階では「地方誌情報」と称しておく．データベース化し共通のプラットフォームで使えるようになったデータを（狭義での）「空間情報」と最終的に位置づけたいと思っているためでもある．

「地方誌情報」は渉猟され蓄積されて，方言研究の重要なデータとなるものである[2]．

4.2 山梨西部方言における推量表現との比較検討

4.2.1 吉田(1996)の要旨

ここから，GAJ データと地方誌情報とを使って具体的な検討に入ってみたい．対象とするのは中部地方の長野・山梨・静岡方言に表れる推量表現の GAJ5 でいう raa 類，(ズ)ラ系のものである．

かつて発表者は吉田(1996)[3]において，山梨西部方言域で行われる推量表現について論じた．吉田(1996)は山梨西部方言における推量の助動詞ズラ，ラ，ツラによる推量表現の基本的な意味・機能，世代差に関して述べ，それらから考察されるズラ，ラ，ツラの特質について論じたものである．この論文のデータは 1990～1995 年にかけて，発表者がフィールドワークで得たものである．具体的にはインフォーマントへの面接質問調査の結果，録音した談話資料からの抜粋データであり，それに内省を加えて論述した．この期間フィールドワークに並行し山梨県の地方誌情報を収集しデータベース化する作業を行った．吉田(1996)は主に調査結果に基づいて論じているが，地方誌情報に表れたデータも記述データ・史的データとして傍証参考資料とした．論述要旨は次のようになる．

現在推量の助動詞ズラ，ラの記述分析からは，次のようにいい得る．基本的に〈(ズラ:ラ)＝(ノダロウ:ダロウ)〉という共通語との対応がある．ズラとラの使い分けには＜疑問～推量＞という意味的差異が関連し，これ

---

[2] 方言に関するデータの扱いについては，調査法・研究法に関する内容の各記述・文献の中で様々に論じ言及されている．具体例として 2 つ挙げよう．

天野義廣 1984　13 方言資料の扱い方　飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）　講座方言学2　方言研究法　国書刊行会

久野マリ子 2002　方言調査データの保存と活用　日本方言研究会（編）　21 世紀の方言学　国書刊行会

[3] 吉田雅子 1996　山梨西部方言における推量表現　国文学論集 29　上智大学国文学会

は共通語のノダロウ，ダロウの意味・機能，使い分けと対応を示す部分がある．

過去推量の記述分析からは，次のようにいい得る．過去推量の助動詞ツラの用法には世代差がある．若年層の表現には〈(タズラ:タラ)＝(タノダロウ:タダロウ)〉，老年層の表現には〈(ツラ:ツラ)＝(タノダロウ:タダロウ)〉という共通語との対応がある．老年層が敢えてタノダロウ，タダロウにあたる使い分けをすると〈(タズラ:ツラ)＝(タノダロウ:タダロウ)〉となる．

以上の記述分析をもとに，意味的差異と時間を表す軸を交差させた推量表現の図式を作る．このことによって推量表現の世代別変化の過程が明らかになり，また，世代別変化はズラ，ラ，ツラそれぞれの構文的・意味的特質と，共通語化により生じた事象であることが考察される．

推量表現の変化の結果，推量の助動詞はズラ，ラ，ツラの3語から，ズラ，ラの2語へと合理化した．しかし推量の言い方としては増え，明晰化・複雑化した．時間に関わる部分が合理化され，意味的差異を表す部分は多様化したわけだが，それは回想の領域において，過去推量の助動詞より意味的に分化している現在推量の助動詞を，「た」の台頭という共通語化の影響を受けつつ採用したことによって生じた事象である．

変化の要因は，山梨西部方言体系の推量表現の内的構造に関わる言語的要因と共通語化であった．今後の変化には人々の言語意識・言語行動の規範観念に関わる心理的・社会的要因が大きくはたらくであろうことが推測される．

4.2.2 吉田(1996)以降の検討

以上のような吉田(1996)に対して，田中(1997)[4]で異論が唱えられた．異論部分の主旨は次のようにまとめられる．

(田中(1997)のデータを得た調査では)「～だろう」に対応する方言形式について質問した項目で，ズラ／ラの両形式が回答された．これは吉田(1996)と一致しない．アンケートという調査形式による結果とも考えられるが，「だろう／のだろう:ラ／ズラ」という使い分けは本来それほど強固なものではなかった，あるいは若年層に向かってより短い言語形式であるラ形に統合される形で使い分けが緩やかになってきていることの反映とも考えられる[5]．

吉田(1996)の論述要旨の最後の部分でも触れているが，推量表現はさらに変化するきざしが当時の調査中にも見受けられた．若年層においてズラの使用が減少し代わりに「デショ」のような共通語形を使う傾向が見られること，一方ラの使用減少はズラほど見られないこと，などがその内容である．田中(1997)が述べる「若年層に向かってより短い言語形式であるラ形に統合される」は一部それと重なる部分もあろう．真っ向から対立する論点は「「だろう／のだろう:ラ／ズラ」という使い分けは本来それほど強固なものではなかった」という部分である．

発表者は吉田(1996)の発表後から現在も山梨県内での調査を継続中であり，推量表現についても調査を続けているが，その調査から吉田(1996)の論旨を覆す結果は得られなかった[6]．また地方誌情報の収集とデータベース化も継続しており，地方誌情報の各内容を検討したが，吉田(1996)の根幹を覆し田中(1997)を重点的に支持する結果は得られなかった．

---

4 田中ゆかり 1997 「気づき」に関わる言語事象の受容－山梨県西部域若年層調査を中心に－ 国語学 189 国語学会
なおこの p69 で吉田(1996)の題名を「山梨西部方言における推量方言」と示しているが誤植である．

5 田中(1997) p73.

6 推量表現に関する報告は以下の部分で発表した．

石川博・吉田雅子 1997 第12編生活と文化 第5章方言 pp1703-1704 玉穂町誌 玉穂町

吉田雅子 2000 第12編生活と文化 第5章方言 pp947-948 豊富村誌 豊富村

吉田雅子 2002 第12編生活と文化 第4章風俗習慣 第4節方言 pp852-857 富沢町誌 富沢町

ここで検討した地方誌情報について述べておく. 今回用いた地方誌情報の内容は以下のようになる.

先行研究など文献類, 研究会等で配布された発表資料, インフォーマントによるノート, 新聞記事, チラシ類, 写真画像, 方言グッズ, ホームページの記載, テレビ番組のビデオ録画, ラジオ番組の録音, など

そのうちデータベース化してあるものは文献類と, 発表資料である. データベースのメタデータを示す(2002 年 12 月 3 日現在).

・総数 841 件

・データ項目 ID, 発行日, 時代, 題目, 著者, 所収誌, 編者, 発行元, 分類, 地域, 区画, 峡別, 市郡, 市町村, コメント, 私用欄

時代:近世, 明治, 大正, 昭和戦前, 昭和戦後, 平成の 6 項目に分類

分類:市町村誌, 研究論文, 趣味著作, 辞典類, 言語地図, 文学作品, その他の 7 項目に分類

地域:中部, ナヤシ, 山梨, その他の 4 項目に分類

区画:東部, 西部, 奈良田, その他の 4 項目に分類

峡別:峡北, 峡西, 峡南, 峡中, 峡東, 東部, 富士, その他の 8 項目に分類

・データタイムスパン 1724 年～2002 年, 279 年間

データベース化した地方誌情報のうち, 何らかの形で推量表現に関する記述情報があるものは 252 件であった. データベース化していない地方誌情報がカウントされていないが, そのことでここでの論述に支障は生じない. 検討・参考した地方誌情報の大概の数を示したものである.

(ズ)ラ系の推量表現は長野や静岡でも使用されており, それと比較対照することで得られる知見が多いと考えるが, 発表者が実際に長野や静岡で山梨と同様の調査ができなかったのは弱みである. なお長野と静岡の地方誌情報収集は行い続けている.

以上に述べたように, 吉田(1996)を訂正更新すべきデータが得られない期間が続いたが, 2002 年 6 月に GAJ5 が刊行され, 推量表現の地図 237-240 図が明らかにされた. これらの地図から吉田(1996)及び田中(1997)に言及できることは多いと思われる. 以下 GAJ5 のデータと比較検討する.

4.2.3 GAJ データとの比較

GAJ237 図「行くだろう」から(ズ)ラ系・GAJ5 でいう raa 類による表現を取り出し示したものが図 1「237 行くだろう(略図)」である. 同様に GAJ238 図「行くのだろう」から(ズ)ラ系・raa 類による表現を取り出し示したものが図 2「238 行くのだろう(略図)」である. 凡例の表記はそれぞれ代表形をカタカナで示した.

図 1 を見る. (ズ)ラ系・raa 類は長野, 山梨, 静岡, 大島, 三宅島, 愛知に分布し, 愛知県境に近い岐阜にも見える.

山梨では 8 地点のうちイクラが 4 地点, イクラエーが 3 地点, イクズラが 1 地点となっている.

長野にはイクズラの地点と, イクズラの類とイクラの類の併用地点が多い. 静岡はイクラ, イクラエーの地点もあるがイクズラの類とイクラの類の併用地点が多い. 大島はイクズラ, 三宅島はイクズラエーである. 愛知ではイクダラーが多くなる.

次に図 2 を見る. 山梨は 9 地点のうちイクズラが 5 地点, イクズライナーが 3 地点, イクドゥラニが 1 地点となっている.

長野にはイクズラの地点と, イクズラの類とイクラの類の併用地点が多い. 静岡はイクズラ, イクズラーの地点もあるがイクズラの類とイクラの類の併用地点が多い. 大島はイクズライナー, 三宅島はイクズラである. 愛知ではイクダラーが多くなる.

図 1 と図 2 を比較すると, 「行くだろう」と「行くのだろう」を別形式で言い分けている最たる地域は山梨である. 山梨では「だろう」「のだろう」がラとズラで言い分けられておりその使い分けは明瞭である.

イクラ
イクラエー
イクズラ

イクラー
イクズラー
イクズラエー
イクンズラ
イクバズラヨ
イクダラ
イクダラデー
イクダラー
イクダラーナー
イクンダラー
イクジャラー
エクジャーラー
イクヤラー

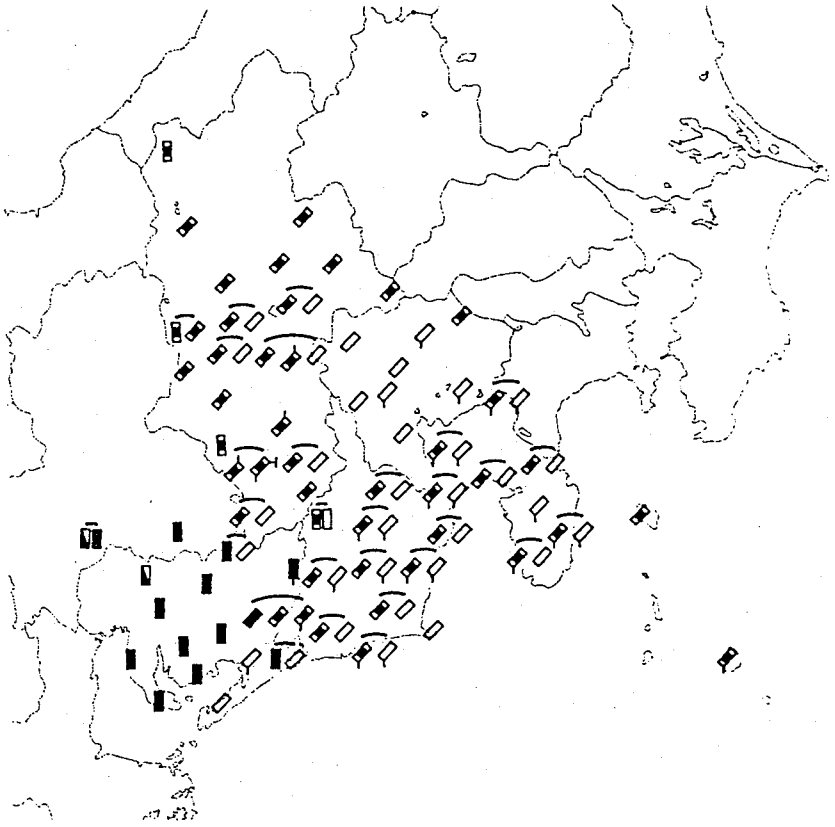

図1　237 行くだろう（略図）

イクズラ
イクズライナー
イクドゥラニ
イクラ

イクズラー
イクノズラ
イクンズラ
イクンズラヨ
イクカ゜ズラ
イクズレー
イクラー
イクラエー
イクンラ
イクダラ
イクダラー
イクダラージャヨ
イクダラーゼ
イクノダラー
イクンダラー
イクンダラー
イクジャラー
イクンジャラー
イクノジャラー
イクヤラー

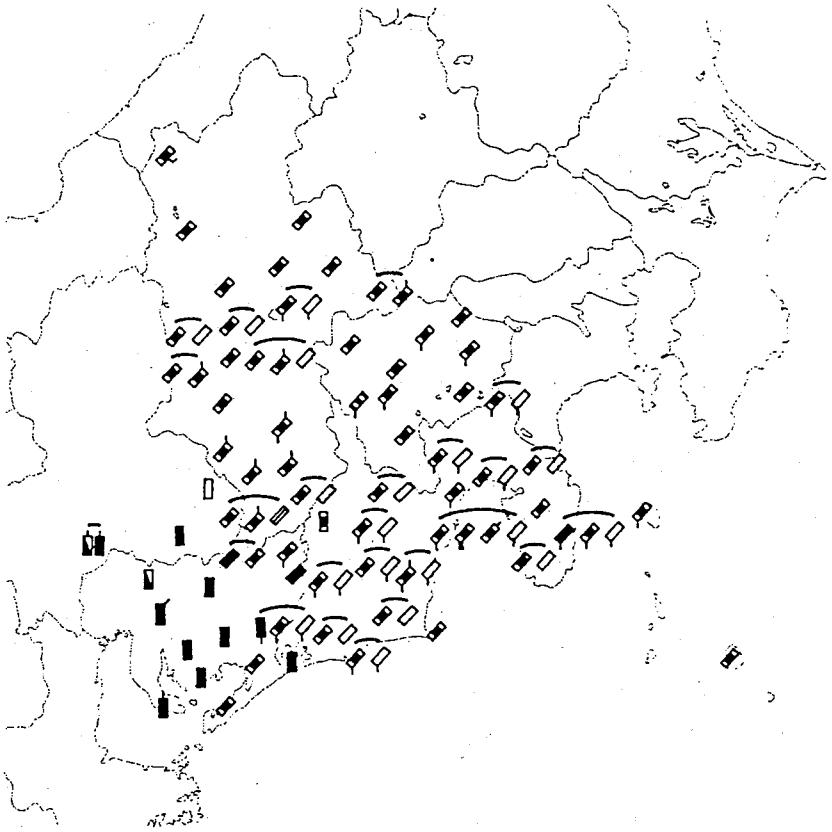

図2　238 行くのだろう（略図）

長野では「だろう」「のだろう」のどちらもズラでいう，または「だろう」「のだろう」のどちらもラでもズラでもいうところがある．静岡も「だろう」「のだろう」のどちらもラでもズラでもいうところが多い．愛知では「だろう」「のだろう」のどちらもダラで表現する，という概況が地図から見て取れる．

(ズ)ラ系・raa 類を用いる地域内でも，ラやズラやダラやそれぞれに終助詞の付いたものなど様々な形式が用いられ，また同じ形式でも地域によって表す意味に違いがある(例えばズラが「だろう」を意味する地域と，「のだろう」を意味する地域とがある)ことが，図1，図2からわかった．そして山梨に注目すると，ラとズラの使い分けがはっきりしており，その仕様について吉田(1996)の内容は一致する．

田中(1997)が述べるラ形への統合傾向の指摘は，発表者も自身の調査から一部正しいと考えている(この詳細については別稿で述べる機会を持ちたい)．けれども「「だろう／のだろう:ラ／ズラ」という使い分けは本来それほど強固なものではなかった」という点は GAJ5 に表れた結果とは一致しない．田中(1997)が述べるとおり，アンケートという調査形式によるためとも考えられる．「だろう」と「のだろう」の違いの説明や使い分けの記述は日本語ネイティブであっても容易にできるものではない．アンケート調査票を見ると「だろう」についての質問の回答部分にラによる形式とズラによる形式の両方が選択用に書かれていることもあり双方選んでしまうこともあるのではと思われる[7]．また「だろう」にズラが出た点について，ノンネイティブは共通語にない形としてズラの方が意識しやすく，またネイティブも「方言は」とあらためて挙げるときには同様にズラのほうを指摘しがちであるという傾向があることも一因であると思われる．

4.2.4 比較結果の検討

以上見てきたことから，山梨西部方言の現在推量表現については基本的に〈(ズラ:ラ)＝(ノダロウ:ダロウ)〉という共通語との対応があることが示された．そしてこのように使い分けが明瞭なのは(ズ)ラ系・raa 類を用いる地域内では山梨が最たるものであり，その他の地域では共通語のノダロウとダロウの意味を方言形式ではっきりとは区別しないことが示された．

では，このように使い分けが明瞭なことは何を意味するのだろうか．同様に，使い分けが明瞭でないことは何を意味するのだろうか．様々な推測が浮かぶが，それを実証するにはこれからも多様な研究が必要である．他の推量表現形式の分布パターンの検証，文献などの検討が必要なことであり，臨地調査データと地方誌情報双方のさらなる充実が求められる．

推量表現の分布や使用状況・意味内容などの様相には今後も注目していきたい要素が多い．(ズ)ラ系・raa 類を用いる地域内では，発表者の調査や収集した当該地域の地方誌情報によると，先述したように若年層ではラに収束される傾向や，「でしょ」「んでしょ」のような共通語形使用の方向もある．また GAJ5 に表れているよりダラ使用域が東進している．

紙幅の都合上ここでは過去推量と名詞述語推量には触れなかったが，これらも論ずべき内容を多く含んでいる．変化を追う調査と観察を続けさらに地図化したい．

5. 地方誌情報との連結

前節では推量表現の具体例として，GAJ5 のデータと，山梨西部方言の記述という地方誌情報の 1 例とを比較し併せて考察した．

GAJ データは，言語地図作成に必要な要素としての均質データ，共時データという性格を持っている．地方誌情報は(そもそも多種データの総称として与えたものでもあるので次元が違うといえば違うのであるが)雑多な非均質データであるが，通時データとして利用できる部分がある．GAJ データと地方誌情報そ

---

[7] 調査票は，秋永編(1996) pp307-316 に示されている．

れぞれの性格を活かして論を進めることができるだろう. GAJ 解説の随所に現れるが, GAJ 地図作成も地方誌情報を参考にしながら進めている. 補いあいながら方言学は進んでいる.

前節では山梨の地方誌情報を例に挙げた. 山梨は小さい県でありまた方言研究の多大な集積がある県とは言い難い. そのようなところでも網羅的に集めたデータとはいえ整理したものだけでも 841 件ある. 大きな県や方言研究の進んだ地域では GAJ データと地方誌情報とを併せて利用する研究成果はさらに多大なものになるであろう.

とはいえ, 異なるデータの共有や連結ということには時間や手間がかかる. それぞれのデータの本質をよく理解していないとデータベースも作れず誤った扱いをしてしまうおそれもある. しかしよく吟味検討したうえでは, 質量そろったデータの集積となる可能性が高いであろう. 傍証データとしても価値の高いものとなる.

本稿で「地方誌情報」と称し扱ったデータは, さらに広く見れば「空間情報」と呼べるものになるであろう. 現在では「空間情報」という概念が広く使われるようになっている. 何らかの地理的な情報が含まれていれば空間情報と称し扱われるが, 方言に関する情報はまさしく空間情報である.

ここからは将来予測の範疇の話になってしまうが, ゆくゆくは方言のデータ1つ1つに緯度経度という ID が付され, Geographic Information Systems(GIS,地理情報システム)で整理され利用されるようになり, 同じように緯度経度を ID に持つ他分野の情報と重ね合わせられるであろう. 方言データは学際研究・融合研究のデータ要素となる. そのような発展的研究の重大かつ不可欠の基盤となるのは, 各専門分野での専門的で詳細な研究(データ収集, データ整備, 記述と理論化, その公開, 共有化への整備など)である. 方言学においても具体的に研究を遂行しながら方言学としての確立, 言語学の中での他分野との連携, 他領域との連携を考えていく必要がある.

6. おわりに

本稿では GAJ に表れた推量表現について概観し, 記述研究の 1 例と比較し併せて考察することを試みた. GAJ データ, その他の言語データの特色に触れ, データ連結によって得られるであろうことの推測も述べた.

推量表現について論じ残したことは多く, データに関して述べたことにも多くの課題を残すが, 全て今後も検討を続けるべき課題である.

参考文献

秋永一枝(編) 1996 山梨県芦安村を中心とした言語調査報告 私家版
小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆(編) 1997 日本語学キーワード事典 朝倉書店
佐藤喜代治(編) 1977 国語学研究事典 明治書院
彦坂佳宣 1994 東海西部地方における推量辞の分布と歴史 国語学 179 国語学会
松村明(編) 1971 日本文法大辞典 明治書院
山口明穂・秋本守英(編) 2001 日本語文法大辞典 明治書院